

トスカ

11/11(日)～11/23(金・祝)

会員郵送受付締切	会員販売期間	一般発売日
5/5(土・祝)	6/30(土)～7/11(木)	7/15(日)

誌上バックステージツアー 04

取材・文◎榎原律子

実在のローマの建築を舞台上に再現!

アントネッロ・マダウ＝ディアツ演出による「トスカ」は、四面舞台をフルに使った豪華な舞台セットが魅力のプロダクションです。その舞台装置の観どころを3つご紹介します。

1つめは、物語どおりにローマに実在する建築物がほぼそのまま舞台セットとして再現されていること。第1幕は聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会、第2幕はファルネーゼ宮殿、第3幕は聖アンジェロ城を模して作られています。実際の建物と比べてみると、P.6左上の写真は本物の聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会、P.7右上が舞台セット。正面の祭壇の絵が同じなのがおわかりでしょうか。このほか第1幕前半の教会内部、第2幕の天井画、第3幕の天使像も実物そっくりなのです。これらの舞台装置は美術家の川口直次さんが実物の資料を基にデザインされたもので、すべて日本で作られています。

ローマの街の臨場感たっぷりの「トスカ」の舞台ですが、よく見ると仕掛けが……。観どころの2つめは、第1、2幕の天井はすべて平面だということ! 第1幕のアーチ型の天井も窓も、第2幕の天井画も、幕に書かれた絵なのです。たとえば第2幕、スカルピアの執務室の壁は奥行きのあるコの字型の舞台セットですが、天井画の幕は舞台正面の壁の上方にバトンで吊られています。ですから部屋の左右の壁と天井画の幕は、実は離れているのです。客席からだ、どう観ても天井は立体的に見えます。画家の技にただただ驚きます。

3つめの観どころは、場面転換。音楽が鳴っている最中に舞台セットが動きます。まず第1幕、教会内でカヴァラドッシが絵を描く壁などが左右にはけると、教会正面の祭壇があらわれます。ここで「テ・デウム」の合唱となりますが、荘厳で広がりのある「テ・デウム」に合うよう、空間も開けるとい、音楽と空間のコラボレーションです。この転換の操作ですが、天井の幕は機械でバトンを入れ替えますが、床に置いてある装置は実は人力で動かしています。演奏のテンポは公演ごとに微妙に違うので、それに合わせて動かすには人の手が一番なのです。第3幕の転換は、聖アンジェロ城の上の場面から牢獄の場面へ(また、その逆)です。このときは舞台前面の床が上がり、天使像のある奥の床が下がり、舞台上から格子が降り、両横から壁が迫り、牢獄という狭い空間を作りだします。この両横の壁を動かすのも、やはり人の手です。このような転換の際、動き出しの合図は舞台監督が出しますが、動かすスピードは音楽を聴いて体で覚えるしかありません。本番が近づくと、音楽に合わせて毎日何度も転換の稽古をするそうです。秋の公演ではドラマティックな歌に酔いしれつつ、舞台装置とその動きにもぜひ注目してください。



第1幕前半。左右の壁や正面の柱がはげると……

教会正面の祭壇があらわれます(第1幕後半)。右隣の実際の教会の写真と見比べてください。



©三枝近志

ファルネーゼ宮殿を再現した第2幕、セッティング中の写真。天井は1枚の布に描かれた絵。部屋の左右の壁とは接していません。



本物の聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会の内部。

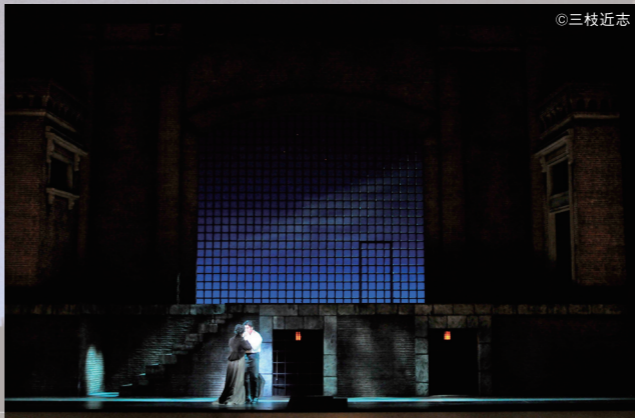
Alamy / JTB Photo



©三枝近志

第3幕、聖アンジェロ城。この床が動き、左右から壁が迫ってくると……

聖アンジェロ城から牢獄の場面へ変わります。



©三枝近志

「トスカ」 名作はゴージャスな 舞台で観たい!

イタリア・オペラの名作「トスカ」は、二〇〇〇年の初演以来、新国立劇場の誇る人気プロダクションとなっている。アントネッロ・マダウ＝ディアツによる正統的で荘厳な演出は、イタリア・オペラを観る楽しみを存分に味わわせてくれる。

時代の大きなうねりを背景に、権力者によって阻まれる男女の愛のドラマを、劇的なオーケストラと輝かしい歌声で描く。プッチーニの「トスカ」は歌・オーケストラ・ドラマの三拍子そろったイタリア・オペラの名作である。加えて新国立劇場では壮麗な演出も味わえる好評の舞台である。

一八〇〇年のローマで、ナポレオンに共鳴する共和主義者で画家のカヴァラドッシ、ローマの警視総監でいわゆる「悪代官」のスカルピア、カヴァラドッシのためにスカルピアと対決する歌姫トスカの三人が繰り広げる壮大なドラマ。荘厳な祈りのなかでスカルピアが邪悪な企みをつぶやく「テ・デウム」、拷問中にも関わらずナポレオン軍の勝利に歓喜して叫ぶカヴァラドッシの「勝利だ!」、カヴァラドッシを救う代わりに体を求めるスカルピアに「これがトスカの口

づけよ!」とナイフを突き刺す場面、そして最後の「見せかけの」銃殺刑、など息を呑む場面の連続である。その劇的な展開のなかで「妙な調和」「歌に生き、恋に生き」「星は光りぬ」といった超有名アリアも登場する、オペラの楽しみを十二分に味わえる作品である。

トスカを歌うのは、新国立劇場には何度も登場している人気の歌姫ノルマ・ファンテーニ。カヴァラドッシは、バイロイト音楽祭や英国ロイヤルオペラなどでローエングリン、パルジファル、ジークムントなどを歌うヘルデンテノール、サイモン・オニールがオペラパレス初登場。悪漢スカルピアは、イタリアを中心に活躍し、艶やかで深い低音が魅力の韓国出身の歌手センジョン・コーがやはりオペラパレスに初登場する。三人の火花散る競演を率いるのは、「鹿鳴館」世界初演での確な手腕を披露した沼尻竜典。開演が待ち遠しい、期待の公演である。